提　言　書

～いわて文化支援ネットワークの活動から～

『震災から6年　被災地の次世代文化を育む』

目次

Ⅰ はじめに …… 2

Ⅱ 活動報告

次世代文化を育む事業

宮古子ども劇団の創設 …… 4

大槌町吉里吉里学園中学部「ふるさと科」公演の演劇指導… 5

ジュニア･アンサンブルみやこの活動…… 5

文化会館や文化団体の人材育成及び支援事業

舞台、照明体験学習会　基礎編…… 6

ホールレセプショニスト研修 …… 6

文化芸術事業助成金講座 …… 7

市民参加型公演の支援

二戸市民劇実地研修会 …… 7

沿岸地域への文化芸術活動指導者派遣

陸前高田市在住小学生へのピアノ指導 …… 8

劇研「麦の会」の朗読劇指導 …… 8

コーディネート事例

馬とふれあおう…… 9

「いわて震災詩歌2017」の発行 …… 9

「いわて文化復興支援フォーラム」開催……10

Ⅲ いわて文化復興支援フォーラム

第一部　詩劇～公募震災詩から～ ……12

第二部　ディスカッション「震災と詩歌」 ……14

Ⅳ 現地の声

宮古での次世代音楽家の育成 ……22

大槌町吉里吉里学園中学部「ふるさと科」公演の指導 …24

被災地の郷土芸能の継承について ……27

「いわて震災詩歌2017」の発行に携わって……30

’子ども劇団みやこデイジー’の設立 ……33

Ⅴ まとめ 「新たな文化復興への提言」～語り紡ぐ力を～…38

Ⅰ はじめに

はじめに

震災から６年が経過しました。

７年目のこの日、いわてアートサポートセンターは「３，11いわて文化復興支援フォーラム」を開催しました。

昨年、県出身の小説家が作品を持ち寄って編まれたアンソロジー「あの日から」の朗読劇を被災地で行ったとき、「伝えたい思いは沢山ある。それを被災地以外で伝えて欲しい」との声を聞きました。

その声を形にしたいという思いから震災詩の公募を行い、詩集「いわて震災詩歌2017」を発行しました。この日は、その詩集から１２編の作品を選び、ピアノの生演奏付きの詩劇（朗読劇）という形で上演しました。

もう、６年目なのだから「きっと、震災直後とは別次元の思いが沢山出て来るはず」と勝手に思っていた自分が恥ずかしくなるほど、あの日の、あの時のおぞましい出来事は、いまだに脳裏に深く刻み込まれていました。いや、むしろ、思いの重さによって言葉は深い底に沈降しつつ、新たに出現できる機会をうかがっていたのかもしれません。

昨年度の提言書で、私は、時の経過とともに、記憶が薄れがちになるという自戒もこめて「文化芸術は、その『記憶』を表現として再創造する役割を担っている」と記しました。「何の準備もない中、夢も希望も現世に置き去りにしたまま、突然に命を奪われてしまった人々の数の多さ。その数だけの無念が今なお漂流している」とも記しました。しかし、誰一人身内を失くさなかった人でさえ、幾多の苦労が震災によって背負わされていることを震災公募詩から知ることが出来ました。

生活基盤が整えられ、交通網も整備されていく中で、心のひだに強く張り付いた苦悩と失った命の叫びは、どこに向かえばいいのでしょうか。

心の復興は、これからが本番です。

あと、何年かかるかしれませんが、文化芸術の役割は、ますます深まります。子どもたちが明日を信じて生きていくために、コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるために、心の内なる叫びを共有するために、文化芸術の新たな取り組みが待たれています。

平成29年３月11日

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
理事長　坂田　裕一

Ⅱ 活動報告

活　動　報　告

次世代文化を育む事業

（1）宮古子ども劇団の創設

劇 団 名：こども劇団みやこデイジー

参 加 者：小学校1年生～６年生　11名

開 講 式：平成28年12月3日（土）会場：宮古市民文化会館 多目的ホール

公　　演：平成29年3月26日（日）会場：宮古市民文化会館 中ホール

「モンスター・ホテルでおどりましょう」

原　　作	柏葉　幸子
脚　　本	坂田　裕一
演　　出	畠山　　泉
歌唱指導	金野　　侑
ダンス指導	久慈　幸恵
獅子踊り指導	大森　　茂
舞台美術	長内　　努

入場者数：180名

宮古市で初めての子ども劇団を設立。宮古市民文化会館を拠点として宮古地域の子ども達が継続的に演劇活動をできる場を提供する。劇団名は「こども劇団みやこデイジー」。約４ヶ月の稽古を経て３月26日に旗揚げ公演を行った。岩手県出身の児童文学作家柏葉幸子の作品を坂田裕一が脚本化。演出は岩泉在住の女優畠山泉、劇中の音楽は宮古市在住のピアニスト金野侑が作曲を担当したほか、盛岡や宮古地域より美術・モダンダンス・民族舞踊のアーティストを指導者として派遣した。

こども劇団みやこデイジーの第一回公演　3月26日

（2）大槌町吉里吉里学園中学部「ふるさと科」公演の演劇指導

場　所：大槌町　大槌町立吉里吉里学園中学部

日　程：平成28年7月～10月22日（土）

参加者：吉里吉里学園中学部9年生（中学3年生）22名

指導者：二宮　彩乃（演出家）、畠山　　泉（女優）

東日本大震災で大きな被害を受けた大槌町の吉里吉里学園中学部からの依頼で、演劇の指導を行った。４か月に渡って指導したのは、県内で演劇の活動をしている二宮彩乃さんと畠山泉さん。吉里吉里学園では、震災後、「ふるさと科」という郷土を見直す学習をしてきた。この学習を生かして、地域に伝わる虎舞を取り入れた「国姓爺合戦」を、秋の文化祭で上演して地元の喝采を博した。

（3）ジュニア・アンサンブルみやこの活動

日　時：平成29年2月19日（日）

会　場：宮古市民文化会館ギャラリー

ジュニア・アンサンブルみやこの第２回目の発表会を開催。子どもたちは、ヴィバルディやパッヘルベルの曲を澄んだ音色で演奏。１年間の練習の成果を披露した。いわてフィルハーモニー・オーケストラのメンバーから指導を受け、短期間での成長が著しい。

月２－３回のレッスン（宮古市民文化会館多目的研修室）の他に、地元弦楽愛好家のアンサンブル「A-RI-E」「セガーレ」の皆さんとの合同で合奏練習に取り組んでいる。

外部団体との交流も積極的に行い、「岩手芸術祭開幕式」（岩手県民会館大ホール）や「もりおかジュニアオーケストラ定期演奏会」（盛岡中央公民館）にゲスト出演するなどの経験も積み重ねている。

文化会館や文化団体の人材育成及び支援事業

（1）舞台・照明体験学習会　基礎編

日　程：舞台体験学習会　１月28日（土）
　　照明体験学習会　２月４日（土）
会　場：宮古市民文化会館　大ホール
講　師：舞台　熊谷　義浩（宮古市民文化会館技術監督）
　　照明　工藤　雅弘（もりおか町家物語館）
参加者：舞台13名、照明24名

普段は利用者として使っている文化会館の舞台・照明の仕組みや機材、スタッフワークを学ぶ機会として、高校生以上を対象に「舞台・照明体験学習会　基礎編」を開催した。舞台体験学習会では、普段は見られないバックヤードの見学や舞台備品の使い方，組み立て方、舞台用語を学び、最後に照明や音に合わせた舞台転換を体験した。

照明体験学習会では、バックステージ・調光室の見学やピンスポット操作体験、照明機材、ステージの照明効果を見ながら明かりの作り方を学び、照明の色作りや操作を体験した。参加者は初めての体験に舞台芸術への興味がさらに高まったようで、他のスタッフワークの講座も体験してみたいと意欲的だった。

舞台・照明体験学習会

（2）ホールレセプショニスト研修

日程／会場：宮古　３月18日（土）　宮古市民文化会館　大ホール
　　久慈　３月19日（日）　久慈市文化会館　大ホール
講　　師：今井貴紗子（サントリーパブリシティサービス株式会社）
参 加 者：宮古16名、久慈16名

昨年度、宮古市と久慈市の文化会館にて実施し好評を得た「ホールレセプショニスト研修」を、今年度は宮古市にて初級編、久慈市にて中級編と会場ごとに内容を変えて開催。

サービスマナー、チケットテイク、お客様の場内のご案内の仕方など接客業務に必要なポイントを学び、様々なシチュエーションを想定したロールプレイングを体験。文化会館が新設される釜石市の会館職員ほか沿岸地域の文化会館から多数の参加があった。具体例をあげ

て教えていただきとても分かり易く勉強になった、気づかされた点が数多くあり今後の業務に生かしたい、と参加者にとって充実した研修になった様子だった。

ホールレセプショニスト研修（宮古市）

（3）文化芸術事業助成金講座

12月２日（金）釜石情報交流センター　会議室

12月７日（水）宮古市民文化会館　多目的研修室

講　師：新田　　満　氏（特定非営利活動法人芸術工房　理事長）

参加者：釜石12名、宮古14名

文化芸術活動団体から要望の声が高かった、文化芸術事業において活用可能な助成金について学ぶための講座を開催。どんな助成金制度があるか、助成金を活用してどんな事業が実施されているか、申請書の書き方のポイントなど、豊富な経験に基づいた新田満氏による実践的な講義に、参加した沿岸地域の文化会館職員や文化芸術活動団体のメンバーは、「今後は助成金制度をぜひ利用してみたい」と語っていた。

文化芸術助成金講座（釜石市）

市民参加型公演の支援

二戸市民劇実地研修会

日　程：平成29年２月19日（日）

会　場：二戸市民文化会館

参加者：11名

初めての市民劇公演が来年度に予定されている宮古市の市民劇参加者による二戸市民劇実地研修会を実施。

二戸市民文士劇の公演を観劇後、バックステージ見学及び制作スタッフをはじめとするスタッフワークについてお話しを伺った。市

二戸市民劇実地研修会

民劇に初めて触れる参加者も多く、来年度公演予定の宮古市民劇の創作活動に向け非常に有益な経験となった、との声が聞かれた。

沿岸地域への文化芸術活動指導者派遣

（1）陸前高田市在住小学生へのピアノ指導（指導者：菊池大成氏）

日　時：平成28年8月28日（日）

会　場：陸前高田市田村ピアノ教室

陸前高田市の田村ピアノ教室より、生徒の演奏能力が高く意欲もあるので、よりレベルの高い指導を受けさせたいが、良い指導者を紹介してほしいとの相談があった。そこで、岩手県盛岡市出身で東京在住のピアニスト・菊池大成さんを紹介・派遣し、陸前高田市にてピアノレッスンを行なった。これを機に、年数回継続してピアノの個人指導が行われることとなった。

（2）劇研「麦の会」の朗読劇指導

日　程：平成28年11月６日

場　所：宮古市そけい幼稚園

指導者：坂田裕一

宮古市にある唯一の劇団「劇研麦の会」が「みやこ市民文化祭」にて上演予定の演目、石川啄木原作「林中の譚」を朗読劇化した作品「さると人と森と」、宮沢賢治原作「注文の多い料理店」の朗読指導のため、演出家を派遣した。文化祭での上演作品内容について相談を受けこれらの朗読劇作品を紹介した経緯もあり、脚本も手掛けた坂田裕一が朗読指導を行った。

コーディネート事例

馬とふれあおう

日　　時：平成28年7月30日（土）13：30～15：00

会　　場：もりおか町家物語館風の広場

共　　催：もりおか復興支援センター

運営団体：十和田乗馬倶楽部、九戸城流鏑馬実行委員会

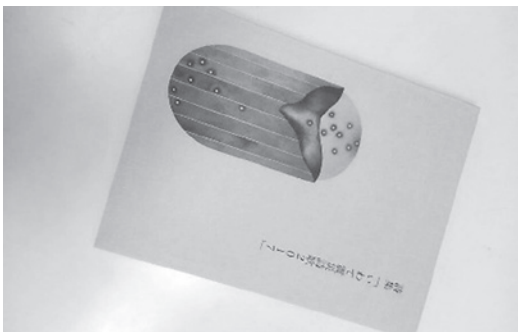
九戸城流鏑馬実行委員会より、同実行委員会の提携する十和田乗馬倶楽部の実施する「乗馬等を通じた被災地支援（馬とのふれあい）事業」を、盛岡に避難してきている被災者を対象に開催できないかという相談を受け、いわてアートサポートセンターが現地コーディネートを行った。当日は約100名の参加があり、内被災者は20名ほどであった。

「いわて震災詩歌2017」の発行

募集：平成28年9月～12月

発行：平成29年2月20日　　Ａ５版500部

震災から５年目を経て、被災体験や被災地を思いやる気持ちを詩に託して伝えてもらおうと、「震災詩歌」を募集した。集まった44編の詩から、20編を選考して詩集500部を発行した。20代から80代までの幅広い世代から寄せられた詩は、震災から５年余の時を経て、完成度の高い作品となっていた。詩集は無料で、県内外の図書館、文芸団体等に贈られた。



「いわて文化復興支援フォーラム」開催

日　時：平成29年3月11日（土）午後1時30分～
会　場：もりおか町家物語館　浜藤ホール
参加者：75名
第一部　詩劇～公募震災詩から
　　構成・演出：坂田　裕一　　ピアノ演奏：鈴木　牧子
　　出演：坂口　奈央、二階堂芳子、鐙　　浩史、山井　真帆、嘉村　祐人

被災した方々や、そこに寄り添う方々からお寄せいただいた44編の詩から12編を選び、ピアノの演奏に乗せて、出演者たちが朗読した。

第二部　ディスカッション～震災と詩歌
　　出演：外岡　秀俊（作家、元朝日新聞本社編集局長）、城戸　朱理（詩人）
　　進行：坂田　裕一（特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長）

東日本大震災を取材した外岡秀俊さんと、盛岡市出身の詩人、城戸朱理さんが、「震災と詩歌」をテーマに、言葉の力や石川啄木、宮沢賢治の世界から見た震災について意見を交わした。

Ⅲ 文化復興支援フォーラム

3.11文化復興支援フォーラム

平成29年3月11日（土）午後1時30分～3時45分　　もりおか町家物語館 浜藤ホール

～第１部～

詩劇～公募震災詩から～

構成・演出：坂田　裕一
ピアノ演奏：鈴木　牧子
出　　演：坂口　奈央、二階堂芳子、鐙　　浩史、山井　真帆、嘉村　祐人

今年の「3.11文化復興支援フォーラム」は、満席の会場にジャズピアニスト鈴木牧子さんの流麗な‘レクエイム’が流れる中、始まった。

ここで詩劇として朗読される作品12編は、平成28年末に岩手県内から寄せられた44編の作品から選ばれたものだ。「５年の歳月を経て、やっと震災時の思いを綴ることができるようになりました」。これは、応募作品に添えられていた作者の手紙である。

2011.3.11で被災した方々や、そこに寄り添う方々の悲しみ、怒り、絶望、そして未来への希望が凝縮したような詩歌がこの日、５人の出演者によって朗読された。

最初に朗読された作品は、「3.11から幾年」という陸前高田市出身の照井良平さんの詩。「あれから５年半　鼻たれ小僧のＭたちは　誰とじゃれ遊んでいるのであろうか　涯の冷たい風の吹く海の底で　変わらず鼻をたれているのであろうか　カニと遊んでいるのであろうか　こんな思いの浮かぶ　海辺の大気の下で　Ｍよ　Ｍよ　としきりにＭを呼ぶ　声のない声がある……」。震災で一瞬のうちに生命を奪われた幼子たちを呼ぶ声は既に嗄れている。

会場を訪れた作者の照井良平さんは、「時が過ぎ、震災が遠のいていく時、元の生活にもどれない被災者にとって、チリ地震の時のように忘れ去られるのが何よりも辛い。櫓を漕いだ海育ちの人間として、震災詩という形を残すことに意味があると思った」と語る。

大船渡市で被災した中村祥子さんの詩「まぶしい朝が来て」は、父親を看取った静謐な時が震災によって突如、大混乱に陥る。「…霊安室は満杯です棺は被災者様の分です●が押さえているのでどこに行っても一般の方にはあそこ見てよすごい煙よ迂回路なし火事じゃないのかこの先通行止めだれか消防車を…」。５人の読み手がたたみかけるように語り、ピアノの旋律が一段と緊迫感を高める。

また、久慈市の神久保敬里さんの作品「昔話になる日」は、全編、遠野地方の方言で綴られている。「雪の降る日には津波は来ないと　年寄りから聞いて覚えた　話 は嘘でした　（略）この間の津波も　いつかは昔話になるでしょう　でも　語るこの悲しみは　いつ　消えるのでしょうか」。この作品は、ベテラン女優の二階堂芳子さんに語られることによって、言葉がさらに生きて、被災した方々の深い悲しみが伝わった。

この日のゲストの外岡秀俊さん（作家）は、この詩劇について、「５人の読み手が続けて発演することによって、あの日のことがまざまざと私の心のうちによみがえってきた思いがしました…その後に流れたお悔やみの歳月ということをもう一度、振り返る非常に素晴らしい時間をいただきました」と評した。

また同じく、城戸朱理さん（盛岡市出身、詩人）は、「朗読者に動きはない。だから演劇的であるわけではないのに、声が複数化、重層化して詩の世界が一気に目の前に開けていく気がした」と語った。

約１時間に及ぶ第一部「詩劇～公募震災詩から」は、12編の作品を語り終えて、会場の大きな拍手が続く中で終演した。

～第２部～

ディスカッション「震災と詩歌」

◆ゲスト

○外岡　秀俊（そとおか　ひでとし）さん

1953年札幌市生まれ。作家、ジャーナリスト。元朝日新聞本社編集局長。著書に石川啄木をテーマにした小説「北帰行」などがある。

○城戸　朱理（きど　しゅり）さん

1959年盛岡市生まれ。詩人。20歳で「ユリイカ」新鋭詩人。2013年岩手日報文化賞。フェリス女学院大学、女子美術大学大学院非常勤講師。現代詩壇をリードする存在。

◆コーディネーター・司会

○坂田　裕一

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長、岩手県演劇協会会長。日本演出者協会員。

まさに圧倒された「詩劇～公募震災詩から～」

坂田　はじめに、東日本大震災発生時刻14時46分の黙祷までに、詩劇の感想をお二人からお聞きしたいと思います。

外岡　まさに圧倒される思いで見入っていました。私は、このフォーラムのご案内をいただいた時に、最初は詩の朗読なのかなと思っていました。ところが、詩劇と書いてある。いったい詩がどうやって劇になるのかというそこのところが、観るまでまったくわからずにここにまいったわけです。

二つの場面で、あっそうか、このために詩劇という形式にしたのかと思った場面があり

ました。一つは遠野方言で全編語られる詩です。神久保敬里さん作の「昔話になる日」という詩。方言というのは書かれたものを読んでも実は伝わってこない部分があって、語られること読まれることが対となってはじめて生きる言葉・伝わる言葉なんだなということを改めて感じました。

もう一つは、中村祥子さんの「まぶしい朝が来て」という詩。最初は、字でこの詩を拝見したとき、静かに流れる日常の風景と突然始まった3.11の災害の時。もうすぐ6年目のその時が刻々と近づいてきていますが、その時の混乱ぶりとですね、その対比があまりに鮮やかで、息をのむ思いでこの詩を拝見したんです。

坂田　詩人の城戸さんはいかがでしたでしょうか。

城戸　私も詩劇について、いったいどういう形になるのかわからないままここに来たんですけれど。別に何か書き加えられているわけではないですよね。

坂田　はい、いっさい書き加えていません。

城戸　それが、朗読者が［立つ座る］というそれだけの動きですよね。だから演劇的であるわけではないのに、声が複数化して、重層化することによって詩の世界が一気に目の前に開けていく思いがしました。

やはり重要なのは、われわれの書いている詩も募集された詩も、詩の分野で言えば叙情詩になります。みなさんは詩の女神って聞いたことがありませんか。詩の女神、ミューズMuse、ギリシャ語ではムーサMusa。実は、詩の女神って一人じゃないんです。役割分担がありまして、9人いるんです。叙情詩の女神は、エウケルネーという名前で、元々は独唱曲を司った女神です。一人の心情を歌う、それが叙情詩の発端であったと。一人ひとりの叙情詩が語られ、声が複数になったとたんに一人の声じゃなくなるんですね。みんなの声、無意識の声となっていく。同時に、だれかの声、だれのものでもなく、だれかのものでもありうる声、声が普遍化していく。それが、さっき私が言った開かれていくということです。

【14時46分黙祷】

ゲストの外岡秀俊さん、城戸朱理さん

2011年3.11のこと・大震災の時

坂田　お二人の3.11についてお話いただきます。外岡さんは、元朝日新聞本社編集局長でいらっしゃったんですけれども、実は震災の年の３月に、若干早く退職をなされまして、最後の仕事が震災の取材になったと伺っています。

外岡　３月いっぱいでやめるということで手続きを進めていたときに、６年前、この震災がありました。私は、89年アメリカにいたときに、ロマ・プリータ地震というサンフランシスコを中心としたかなり大きな震災があって取材をしました。95年に阪神・淡路大震災が起きたときには、初日から入って１年半現地で取材をしました。08年に四川大地震のときも３度ほど取材に行ったことがありました。そういう取材の体験があって、もうあと20日でやめるというときにですね、現地に入りました。

ちょうど一週間目に上空からジェット機で函館まで行って、翌日から一週間車で３県を取材しました。それが私の最後の仕事になりました。

城戸　震災の時は、ちょうど仕事がなくて、鎌倉の自宅で家内と二人で休んでいるときに地震にみまわれまして、とりあえず家の外に出たんですけれど、どんどん激しくなっていくんですね。自宅の揺れ方からして、崩壊してもおかしくないと覚悟するほどの揺れでした。同時に停電しましたんで、一切情報が入ってこなくなったんですね。とにかく布団にくるまって情報をひたすらtwitterだけは使えたので、twitterやラジオで情報を得ようとしていました。夜の10時ぐらいかな突然テレビが映るようになって、信じがたいような津波の映像がつぎつぎと映って、そこから本当に自分にとっての東日本大震災が始まった感じですね。

新聞や雑誌の連載を持っていましたから、震災についてインタビューされたり、何か原稿を書かなくてはならなくなって、それはやはり自分の興味の問題ですから。失語状態に陥っているところから無理矢理何か少しでも明るいことを見つけ出そうとあがいていたような気がします。一言で言うなら自分の無力さを思い知ったという感じでした。

坂田　それは、被災したのが自分のふるさとというのが強かったんでしょうか。

城戸　人間って心があって身体がありますが、人間を造り上げているものは心と身体と土地だと思うんです。その土地がこれだけ大きな被害をくらい、場合によっては福島の汚染された第一原発周辺のように100年200年と帰れないかもしれないという。そのショックがありました。

特に、母方の実家が福島第一原発のまさにある双葉町で、叔父叔母が全員避難しました。相馬地方というのは、日本の中で特殊な位置で、相馬と熊本の相良、それから鹿児島の島津の３つだけは、鎌倉時代の地頭職が江戸時代も大名まで繋がっているんです。つまり12世紀から19世紀半ばまで領主が変わっていない。

司会の坂田裕一

住民も変わっていない。相馬の母方の実家というのは、鎌倉時代からそこに住んでいたわけで、26代にわたって墓がある。小説の神様と言われた志賀直哉が幼少期に祖父直道に連れられて遊びに来ていたそうです。

800年、代々暮らしていたところが、もう帰れない。叔父叔母たちは、それぞれ福島市、会津、埼玉川越に避難した。そして避難した先でつぎつぎ亡くなっていきました。

啄木と賢治の世界と震災について

坂田 外岡さんは震災の取材の時に賢治全集をお持ちになって取材に行ったと以前に伺いましたが。それはなぜですか。

外岡 上空から被災地を見て、同僚仲間にとにかくカンパをして被災地にお届けする救援物資を買い集めてくれと頼みました。その物資を車に積み込み、その日に八重洲のブックセンターに行って、地図を買ったんです。それと『ザ・賢治（宮澤賢治全一冊）』という電話帳のような分厚い本ですね、それを買って持って行きました。

坂田 なぜ賢治と思ったかというのは、今振り返ってみてなんかあるんでしょうか。

外岡 賢治は明治三陸津波の年（明治29年）に生まれて、昭和三陸津波の年（昭和８年）に死んでいます。その中間には、日照りもあり、そういう中で生きてきた人ですよね。今回のような規模の震災に「耐える精神・耐える力」というのは、やっぱり賢治だろうと。

坂田 城戸さんは賢治の作品についてどう思われますか。

城戸 今、「耐える力」とおっしゃいました。対置するなら石川啄木はどちらかというと「負ける力」でしょうね。負けてしまって、そこでの思いを語るという感じがします。

宮澤賢治の作品で、あまり知られていないんですが、大正７年に書かれた「峯や谷は」という小品がございまして、これは主人公が山を越え谷を越えひたすらマグノリアの花を探すという物語なんです。マグノリアは白木蓮です。この作品では、マグノリアが、宮澤賢治が言うところの本当の幸せのメタファー（隠喩）になっているんですね。幸せを探して山を越え谷を越えても全然見つからない。主人公が一番高い峯について後ろを振り返ったらば、自分が通ってきたすべての道にマグノリアが咲いていたという物語なんです。

幸せを探して歩いている瞬間瞬間に実はすでに幸せがあり祝福された存在だったということです。賢治は、そのことを書いてくれました。そのことによって我々は、日々を生きることが、すでに生かされているという祝福の内にあると気づける。こういう作品を書けるのは賢治でしょうね。

坂田 外岡さんは、著書に石川啄木をテーマにした小説『北帰行』を書かれているので、啄木派かなぁと思ったんですが。

外岡 去年が漱石没後100年で、今年が生誕150年です。丸善が出しているPR誌『學鐙』が120周年特集というのを今春号で、それが漱石特集なんです。私は漱石と個人主義という題で文章を書けと言われまして、その冒頭が、私には過ぎ去らない作家が３人いる、それは漱石と啄木と賢治だと書きました。その３人の共通点が二つあると、一つは今も注釈な

しで誰でも読める、もう一つは雅号か名前で呼ばれていること。

国民とものすごく近い、それゆえ名前や雅号で呼ばれている。しかも100年経って、今だに読まれている。この３人は私の中では別格かなと思っています。

坂田　啄木と賢治が今回の震災を目の当たりにしたなら、どんな作品になるんだろうと、お二人からお聞きしたいのですが。

城戸　恐らく石川啄木は、被災地で被災した存在じゃなく、もっと内陸部とかにいて、状態を見てものすごい名作を書くと思いますね。でね、短歌だと思います。それは悲しみが普遍化したようなみごとな作品になると思います。

宮澤賢治は、書くとしたら自分の中で納得できるまで時間をかけて、恐らく寓話的な童話として表現するんじゃないでしょうか。場合によっては激しい詩になる可能性もありますね。

外岡　私の答えは、ふたりとももうすでに書いていると思います。賢治の場合で言えば、『銀河鉄道の夜』とか、『グスコーブドリの伝記』とか、あそこに描かれているのは、まさに自分を捨てて、あるいは亡くなっている人たちの思いをレクイエム（鎮魂曲）のようなものとして描いていますね。啄木もふるさとということを発見した歌人としてね、もうすでに答えを出していると思います。

詩の力・言葉の力について

坂田　外岡さんにはジャーナリストの面と小説家の面と二つの面から、詩の力・言葉の力についてお話ししていただきたいのですが。

外岡　たまたま今日の朝日新聞ですが、朝日新聞には2000人ぐらいの記者がいて、おそらくこの一面のこの記事を書くために30人ぐらいの記者が取材に入っているんですね。朴大統領にはたぶん10人以上、森友学園には40人から50人の記者が動いてこの記事が出来ているんですね。真ん中に、原発について書いた上中下の連載記事があります。これは、たった二人で記者が書いているんですが、普通ですねこの３回の記事を書くに当たって、大学ノートだいたい一人が6冊ぐらい取材をしています。そうしないとこの記事は出来ない。膨大な人と膨大な労力をかけて出来上がったものがたったこれだけなんです。

創作は、たぶんまったく逆の作業で、一つひとつはもっともらしいけれども、全体は壮大な嘘だという、まったく逆のことをやらざるをえない。ということで私は小説を書くときは中原清一郎という名前で書いています。自分の中でけじめをつけておきたいのです。

坂田　城戸さんにお伺いしたいんですが、詩人として書かれる言葉と評論を書かれるときの自

分のお気持ちの違いというのは、どういうふうに分けていらっしゃいますか。

城戸 詩と散文の違いですね。言葉は、韻文か散文かに分かれます。散文の散という言葉は、もともとは漢字でとりとめが無いという意味です。つまりいくら書いてもいいというのが散文の本来の意味です。それに対して韻文というのは、韻・決まりがあるという意味です。日本であれば、五七五とか五七五七七とか韻律ですが、これは音が決まっている。英語であれば、弱強五歩格というiambic pentameter、弱い音、強い音を交互に5回くり返して一行を作る。一番有名な形式で、我々にとっての五七五のような形式ですね。わかりやすく言うとシェイクスピア劇の台詞のほとんどがこのリズムで書かれているんですね。有名なハムレットの「生か死かそれが問題だ」というフレーズ。to be or not to beは弱強弱強の繰り返しなんです。それが一連に5回ある。決まりがあるか決まりが無いかというのが詩と散文の違いなんです。

＜会場からの質問＞

●外岡さんへの質問

阪神・淡路大震災と東日本大震災の両方を取材した経験から、大震災を経験した地域の方の受け止め方に違いがあるのか、また復興に対する姿勢はどうか、あるとすれば宮澤賢治の耐える力が地域に影響を及ぼしているからだと考えるか。

外岡 阪神の場合は被害甚大で、大変多くの方が亡くなっているわけですが、幅20キロなんですね。今回の場合は、300キロ以上にわたっていますし、仙台のような大都市から小さな町から、いろんな形でいろんな被害にわたっていますね。しかも、福島では原発被災が続いていて、6年経って12万人の方が避難している災害はですね、かつて例が無かったと思います。そこを立て直すのはとても大変なことだろうと思います。

一つ可能性があるなと思うのは、例えば被害の少なかった内陸部の人たちと沿岸部の人たちがどれだけ連帯できるかということです。その段差が阪神は、あまりにもほかの例えば大阪と、あるいは東京との段差が大きくて、いつのまにか見えなくなってしまった。やはりそれと違う経過を辿るためには、内陸部の例えば盛岡の方たちと沿岸部の方たちがどれだけ心通わせられるかということにかかっていると思います。

賢治の耐える力を我々も感じて、前に進まなくてもいいんだけれども、ここに留まる、ここに生きるということだけで十分だと思います。

●詩の力、言葉の力に関連して

語り得ない事の前では沈黙しなければならないとの意味の哲学者の言葉があったと思います。この大震災で受けた傷や心の中にある思いの中で言葉にして語られることと、語ることの出来ないことの違い、境界はどこにあると考えますか。

城戸 これは、今まで、私が生涯聞いた内で一番難しい質問です。「語りえぬことに関しては沈黙するしかない」、これは、ルートヴィヒ・フォン・ウィトゲンシュタインという哲学者の『論理哲学論考』(Tractatus Logico-Philosophicus)という本の中の一節です。この命

題は、神について語りうるかということの最終的な答えとして出されたものだったと記憶しています。より高次の者があるとしたら、それはより低次な者に姿を現さない。だから神については語り得ないということを論理的に語った上で、ウィトゲンシュタインは「語りえぬことに関しては沈黙するしかない」と哲学的な結論を下しました。

その意味では、震災に向けて我々が問いを発するときに、なぜ東北だったのか、あるいはなぜ３月11日だったのか、こういう問いは、いくら投げても答えが戻ってこない問いになりますね。それに対して例えば、明治三陸津波、昭和三陸津波と経験しておきながら、その伝承というのが、きちんと伝達されていなくて、津波被害が拡大した。こういう部分に関しては、語りうることであるわけですね。厳密にどこに境界線があるかはお答えできませんが、これをむしろ形而上学的な問題に決してしないことというのが重要なんだと思います。

司会　「震災と詩歌」を巡るお話、お時間となりました。あれから６年の歳月が過ぎた今日、非常に意味のあるフォーラムだったと感じます。ありがとうございました。

Ⅳ 現地の声

「宮古での次世代音楽家の育成」

宮古市民文化会館芸術監督　寺　崎　　巖

先ずは先人の育成に関わった歴史を紐解く。宮古市出身の音楽家は多数いるが、その活躍ぶりはあまり知られていないのも事実である。筆頭は岩船雅一氏（1911 ～ 1978）。宮古市民文化会館がある磯鶏地区出身のヴァイオリニストである。1961年には、日本弦楽指導者協会を設立し、弦楽の指導の礎を築いた。私は東京での理事会に参加するたび、その偉業を伝え聞く。現会長（山岡耕作氏・東京藝術大学名誉教授）や関東支部理事長（柴香苗氏）、九州支部長（篠崎氏・N響コンサートマスターの父）等、著名理事の先生方で岩船氏の薫陶を受けたヴァイオリニストは多い。

また宮古市での実践で多くのヴァイオリニストを輩出した梅村功二氏の功績も大きい。その梅村門下の出世頭である久保良治氏は、現在、弦楽指導の頂点とも言える桐朋学園講師兼桐朋学園オーケストラアカデミー教務主任となって活躍中。国際レベルのヴァイオリニストを輩出し続けている。周知のところでは、昨年BBCスコティッシュ交響楽団の副コンサートマスターに就任した伊藤奏子（かなこ）氏は、地元での演奏活動も多く、宮古地区の後進の指導にも関わっている。

声楽の黒木香保里氏は中堅として中央で活躍。最近ではオーボエの大久保茉美氏などの活躍が見られる。

現在は震災前からの少子化の影響もあり、全体的に低調な状況が続いている。

過去に多くの人材を輩出した背景を考えると、次の３点が大きかったと思われる。

①底辺拡大・・・昔から多くの子どもたちが音楽に親しむ環境作りが行われていた事である。現在は少子化や震災の影響などで厳しい状況が続いている。

②中央との連携・・・以前は中間地域の盛岡市、東京との連携があり、状況によっては海外とのパイプを持っていた。才能を伸ばす条件を整えていた。

③子どもが中心で輝く発表の場の設定・・・個々の才能や特徴を捉えた指導が行われ、成果の発表の場が設定されていた。

宮古市民文化会館の事業の中核に次世代育成が位置付けられているのは、過去栄光を誇っていた芸術文化活躍の復活を狙ってのことである。震災での影響も多大な要因ではあるが、それ以上に指導体制や指導者の不足、指導者のスキル低下、他地域との交流不足等が重なり低調な状況に陥ってしまったとのではないだろうか。

宮古市民文化会館ではこれらの実態を踏まえて、教育プログラムの実践を始めた。その一つが「ジュニア・アンサンブルみやこ」である。宮古市の教育振興基金の制度を活用し、指導者は

指導実績のあるいわてフィルハーモニー・オーケストラのメンバーが担当している。楽器無償レンタルなど負担を軽減して入会のハードルを低くし、多くの子どもたちが気軽に参加できるよう配慮している。

2015年10月には、ウィーンフィルメンバーに指導を受ける機会を設定。夢のような共演も果たした。コンサートキャラバンメンバー（NHK交響楽団・東京都交響楽団）によるクリニック、伊藤奏子氏のスペシャルレッスンなど一流芸術家との接点も定期的に設定している。一流演奏家の音楽に直に接することは子どもたちの成長に多大な影響をもたらす重要なファクターとなる。今後は個別指導の体制を強化して、個々の才能を発揮できる環境づくりに取り組む予定だ。

今年の２月の発表会では、２年目とは思えない立派な演奏を披露した。３月20日には、盛岡市中央公民館での「もりおかジュニア・オーケストラ定期演奏会」に客演出演した。

また、昨年の「岩手芸術祭開幕式」などの対外活動にも積極的に参加し、経験を深めている。

このような地道な教育普及事業は結実までには時間を要するが、確実に地域芸術文化の活性化をもたらす筈である。ジュニア・アンサンブルみやこの活動を起点にして、他にも子どもたちの音楽を学ぶ環境を更に整備していく予定だ。また、指導者の育成も必要な時期に来ている。地域に根差した活動を続ける指導者が指導スキルを高めることは重要であるが、学ぶ環境が乏しく、実際難しい現状がある。指導者養成の講座などが急務であるといえる。この点は、文化会館などを起点に、指導者講習会などの定期開催を進めていきたい。

[まとめ]

才能の宝庫といっても過言ではない「宮古」は、とりわけ音楽に関しては県都「盛岡」を凌ぐ人材を輩出してきた歴史がある。環境と方法を整備すれば必ず多くの才能が見いだされ、開花していくものと思われる。宮古市民文化会館の教育プログラムにご支援を頂ければ幸いである。

大槌町吉里吉里学園中学部「ふるさと科」公演を指導して

演出家　二　宮　彩　乃

2016年の夏から秋にかけて、岩手県大槌町立吉里吉里学園中学部において、同校９年生（中学３年生）22人と演劇づくりをすることになった。夏休みの前に１回、そして夏休みに宿題を出して、それから秋の文化祭まで月１～２回ほど時間をいただいた。

これまでにも演劇づくりを目的とした授業は何度か経験があったが、今回の吉里吉里学園の場合は、「ふるさと科」という授業の枠組みの中で演劇を創作するというものであった。「ふるさと科」とは、震災後に出来た新しい科目で、同地域の小中学生は皆、必修科目として履修するのだそうだ。昨今、地域創生が叫ばれるなか、町を以て、こうした取り組みがあるのは素晴らしいことだと思う。

というわけで、「ふるさと科」における演劇づくりでは、「ふるさと吉里吉里の素晴らしさを再発見すること」を第一目的とし、その手段として「演劇」を利用する。つまり、「ふるさとを発見するという過程の中で台本を生徒たちと一緒につくる」というのが今回の私の仕事であった。（同校では、例年演劇に取り組んではいるが地域に取材し、子どもたちと台本をつくるといった取り組みは今回が初めてだという。）

吉里吉里学園で指導する二宮彩乃さん

「ふるさとを再発見する」「台本を生徒たちとつくる」これらの課題に応えるには、全６回というのはごく限られた時間であったのだが、それでも当初から自分の中に徹していたルールがある。それは、私が受動的であること。吉里吉里に生きる子どもたちこそが主役であり、こどもたちが出してくれるものをすべて能動的・肯定的にとらえ、受け手としてこれらを誠実に形にしていく、これに徹しようと思った。台本をつくる上では、指導者としていろいろ指示を出してつくりあげる方が一般的には完成度も高くなるし、創作も早いのだが、震災から５年を経た場所で生きる子どもたちのリアルな声を出してもらいたい、そう思ったとき、私自身がせわしい必要はなくなる。というわけで、全６回は形にすることばかりにこだわるのではなく、子どもたちの声をアウトプットしてもらう機会をたくさんつくること、そのプロセスに重きを置いた。

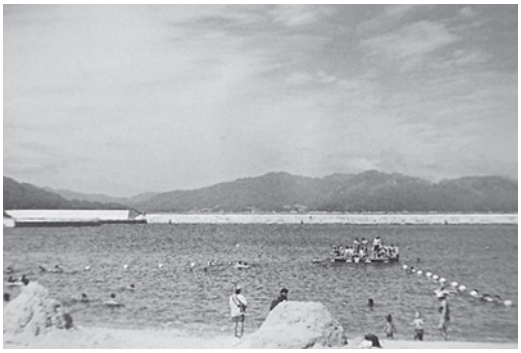
まず、夏休み前に宿題を出した。名付けて「吉里吉里クレヨン箱」。自分たちの活動範囲（吉里吉里）をフィールドワークしてもらい、それぞれ思い思いに吉里吉里の12色を撮影してきてもらう。あえて、風景や、物などに限定せず、また12色もどんな12色でもよい、とした。そし

て夏休み明け。22 人分の 12 色をみんなと共有する。昼の海、夜の海、コンクリート、工事中の重機、「工事中」の看板、地元の祭り、神楽、虎舞、校舎、いつも歩いていた道、一人で見つけた風景、友達と歩いた風景…本当にいろいろ出てきた。

大人の私たちが思っている以上に、彼らの目はいろいろなものを見て、いろいろな視点をもっているのだなあと感じた。あのときと今と、これから先。それらを見つめる冷静な視点。そしてそれすら内包して、目に映る全てを彼らなりにつぶさに受容して、進んでいく力強さも感じた。その後、集まった写真から、彼らと創作する台本のメインイメージとして２つのキーワードを見出した。「海」と「虎舞」である。22 人分の心がわくわくするような求心力あるキーワードが、案外素直に写真たちに顕れていたので、私もそこに飛びついたのだ。

「吉里吉里クレヨン箱」を制作する生徒たち

それからは、この２つの言葉を軸にした取り組みを重ね、少しずつ彼らの言葉をつみあげた。台本の原作は、吉里吉里神楽や虎舞にもなじみのある、近松門左衛門の『国姓爺合戦』にした。正義のために日本をあとにして大陸に渡る主人公の物語である。台本の原作を『国姓爺合戦』にした理由は、「海」そして「虎舞」という子どもたちと吉里吉里をつなぐ２つのキーワードが自ずと入っていたこと、そしてもう一つは、物語の中盤、故郷を思う主人公のモノローグに、自分たちが住む吉里吉里への想いを盛り込む構成にしたいと考えたからだ。それを引き出すべく、子どもたちに投げかけた問いがある。―「高校や大学進学でも、10 年後でも、30 年後でもいい。もし、君たちがそのときにこの場所、吉里吉里を思いだすときに、見たい風景は何？聞きたい音は何？行きたい場所はどこ？」― 自分の等身大でその答えを言葉にしてくれる子、物語の主人公の境遇に重ね合わせて答えてくれる子などさまざまで、嘘偽りがない分、すとんと胸に入ってくる心地がした。それらの言葉を通して、彼らだけが知っている海が、ふるさとが一番美しく見える時間、友だちとの時間、祭りの囃子、色鮮やかな記憶たち、それからそこにリンクする率直な感情たちがたくさん見えてきた。そうして積み重ねたこどもたちの言葉を台本の形にしていく…。



思い返してみると、実は私は吉里吉里の地区をそんなに歩いていない。だけれど、吉里吉里と聞いて思い出すのは、青い海と同じく明るく前向きな彼らの姿である。今回のプロセスで、そんな彼らの姿を通して私が気付かせてもらった吉里吉里の魅力がたくさんある。その魅力の数々が当たり前のように彼らの心に刻まれていることも今回の授業でいたく感じた。それらが近い未来に束となって、これから先の吉里吉里を支える力となることを強く願っている。

文化祭当日の舞台（2016年10月22日）

被災地の郷土芸能の継承について

東北文化財映像研究所　阿　部　武　司

2011年３月11日から６年の歳月が流れました。震災の後、５月に被災地に赴いて郷土芸能の映像記録を撮り始めて、あっという間の年月でもあり、密度の濃い年月でもありました。

収録した郷土芸能の数は、定かでは無いし、取り溜めた時間たるや途方もない長さになって数値を出せません。10テラのハードディスクが５、６台になっているだろうと思います。その殆どは開設しているYouTubeライブラリーにアップし公開しています。

震災前は、沿岸の郷土芸能とは、一部しかお付き合いがありませんでしたが、被災地芸能の記録を通じて親密になった団体は、数え切れないほど増えました。

そして、今まで理解の及ばなかった地域社会の郷土芸能に対する思いや、あり方が少しずつ解ってきました。

陸前高田市は、町場が壊滅し、復興が大々的な嵩上げ工事により、新しい市街地形成が行われています。これによって同市最大の祭り「七夕」行事は、様々な問題を抱えながらも、町衆の心意気とふるさとへの思いを持続させようと、継続されています。しかし、旧町内会が殆ど解散し、一部有志達の組織で行っている為に、自力での継続に大きな壁があるようです。そのため支援者達の祭り参加が支えている地区も多くありますが、年々その輪が狭まって来ています。

うごく七夕（陸前高田市）

大船渡市は、震災の年の秋には、「郷土芸能祭」を開催して、被災地の芸能の復活を促進してきました。その原動力になったのが、昨年60周年を迎えた「大船渡市郷土芸能協会」です。市内30数団体が加入し、芸能祭を毎年開催してきました。又助成金などの調達にも尽力し、団体の育成を図っています。協会は、一昨年より「黄金けせん民俗芸能大祭」という県外も含めた大きな芸能公演を開催し、大勢の市民の共感を得ています。気仙地域では、未だ例大祭を開催できない地域も有ります。そうした意味で、「黄金けせん大祭」は、市民が芸能に親しむ絶好のチャンスとなっています。

虎舞（大船渡市）

釜石市は、やはり虎舞連中が中心になって震災の年から活動を活発に行って来ており、「尾崎

神社例大祭」も様々な困難を乗り越えて開催されました。その心意気がその後も継承され、「虎舞フェスティバル」も途切れずに行われています。釜石市は、漁港毎に、虎舞や郷土芸能があります。唐丹地区も甚大な被害を乗り越えて、「七年祭」を開催し、復興への意気込みを示しました。両石や鵜住居、片岸などの地区も、虎舞の復活で祭礼行事に勢いをつけています。

大槌町は、震災によって中心部が壊滅し、郷土芸能関係者やその家族も多くの方々が、犠牲になりました。震災後の春の花見に、満身創痍の虎舞が舞い、避難者の心に灯りを灯したことで知られています。全国からの支援を背景に、心の傷を乗り越えて次々に虎舞、鹿子踊、大神楽、七福神など復活しました。震災の年の秋祭には、神輿渡御は行わずに、神社境内だけで催しましたが、町民があふれ出るほどの賑わいを見せ、久々に顔を合わせる住民たちの笑顔で盛り上がりました。大槌町民にとって郷土芸能は、祭りと一体化した様相で捉えられています。郷土を離れた若者達は、祭りの季節のために懸命に働き、揚揚とした気持ちで帰省します。大槌町も人口減少が進んでいますが、小中学校で学んだ郷土芸能を忘れずに、ふるさとへの思いを募らせています。やがて彼らが、その後継者として歩み出すことでしょう。

金澤神楽（大槌町）

山田町も海岸線の集落が壊滅的な被害を受けましたが、震災の年に、八幡神社の祭礼を行ったことで奉納郷土芸能が全部復活しました。それからは、装束を拾い集めたり、虎頭を修繕したりと、懸命な努力をしながら、盛岡などに赴き公演して来ました。辛い避難生活の中、慣れ親しんだリズムとメロディーに多くの町民の心が癒されたことでしょう。大杉神社の神輿が壊れ、潮垢離や海上渡御は出来ませんでした。しかし、数年後に各地からの支援で、神輿が修繕され復活したときには、祭りの熱気は震災前ほどに高まっていました。山田町中心部の祭り復活は、次第に他の浜にも広がり、2016年には、震災前から途絶えていた祭りが久々に船越でも復活し、虎舞、大神楽、剣舞等が奉納され、仮設住宅に暮らす住民の歓喜を誘いました。

山田町祭礼渡御

宮古市では、黒森神楽が震災から百か日を経た日に、田老の仮設住宅で活動を再開しました。それからは精力的に各地で公演活動を行い、ロシア、フランス、アメリカに招かれるなど、国際的な活動を展開しました。2012年の「北廻り巡行」もボランティアで被災地を廻り、相変わらずの人気ぶりでした。

400年ほど続く黒森神楽の巡行は、被災地の人々にとって、暮らしに溶け込んだ行事であり芸

能であったのでしょう。正に信仰と暮らしが密着し、自然と共に生きてきた人々の思いが神楽に託されていたのでしょう。しかし神楽一行が逗留する神楽宿の減少は歯止めがかからず、新たな神楽宿や巡行先の開拓が急務になっています。その一方、黒森神楽衆は、この間、4人の若者を育成し、神楽巡行に新鮮さを吹き込み、観客の喝采を浴びています。

宮古市沿岸の郷土芸能団体の多くは被災しましたが、津軽石の法の脇鹿子踊は、以前の集落の人達や子弟に呼びかけて復活を果たし、2016年10月には中尊寺で公演を果たしました。

黒森神楽（宮古市）

岩泉町では、震災で郷土芸能は被害を受けませんでしたが、2016年の台風10号によって、小本川上流にある中島集落が大被害に遭い、中島七ツ舞の装束等に被害が及びました。

岩泉町の中野七頭舞は、全国的にも知られ、被災地のシンボリックな郷土芸能として、様々なイベントに招かれています。

普代村の鵜鳥神楽は、直接的な被害は少なかったのですが、特に南廻りの神楽宿の被害が多く、神楽としては、正式には巡行を２年間休みました。但し、公演依頼や宿主の要望には応えて神楽上演を行いました。震災後2014年の南廻りから宿取りを行い、正式に巡行を再開しましたが、神楽の中心メンバーが病に倒れ亡くなるという不幸に見舞われてしまいました。その後、様々な困難を乗り越えて巡行を継続しています。

沿岸被災地の郷土芸能は、震災直後から活動を再開し、地域の人々を励ますと同時に自らも奮い立たせてきました。

2011年３月下旬、陸前高田市大石の虎舞メンバーが、ガレキの中から虎舞の頭を見つけ、廃墟にたたずみ、口拍子で虎舞を踊ったという新聞記事がありました。彼らは、「何も無くなったが、虎舞の拍子は残ってる」と語っています。

又、山田町の宮司さんは、「祭りが消えたら町が無くなる。郷土芸能の灯を消しては駄目だ」と語っていました。

そして震災６年を経た今、岩手三陸沿岸の郷土芸能団体は、少子化、人口減少という危機に直面しながらも、「継続させないと自らの存在意義を失う」と言う切迫感をもって、伝承活動に励んでいます。

「いわて震災詩歌2017」の出版に携わって

岩手県詩人クラブ会長　東　野　　正

2011年３月の東日本大震災から６年近く経ち、いわてアートサポートセンターが震災を巡る詩作品の公募を行い、詩集としてまとめるという事業に、私は岩手県詩人クラブとして選考等に携わったことについて報告する。

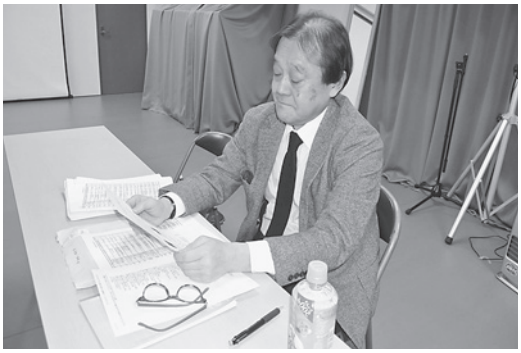
被災直後に流れてくるニュースは、岩手県も宮城県も、そして福島県以南も、特に沿岸地域では「壊滅的な被害を受けた」ということであった。その実際の状況をつかめないまま、「壊滅的な被害」を受けたという言葉が重くのしかかってきたことを思い出す。停電が回復し、テレビニュースの映像で、津波が人を、生命を、生きてきた時間を、記憶も思い出も、家も家具も写真も、車を町を歴史を文化を流し去る映像に言葉を失う他はなかった。無茶苦茶！破壊！壊滅！残酷！非道！喪失！悲惨！な状況に呆然とするしかなかった。信じがたい光景！を見続ける他はなかった。

詩は、もしかすると散文よりも震災の痛切な悲劇を心の痛みを端的に描くことができる表現形式かもしれない。一行の詩句に、万感の思いを込めることも、悲嘆の怒りの感情を込めることもできるのだ。それは痛切な表現となって、詩を読む者の心にいつまでも残るのである。また、今回のような歴史的に未曾有な事態を記録する上でも、叙事詩的な視点での書き方もまた有効であろう。

言葉は死ななかった。言葉による支援活動が続いたのである。言葉は直接的には、空腹感を満たすことも、冷え切った身体を暖めることもできず、生活の再建に直接的には役立たないかもしれない。しかし、心を一行の言葉が支えることができるのである。その言葉を握りしめることで再び立ち上がることができた人は数多くいたはずである。

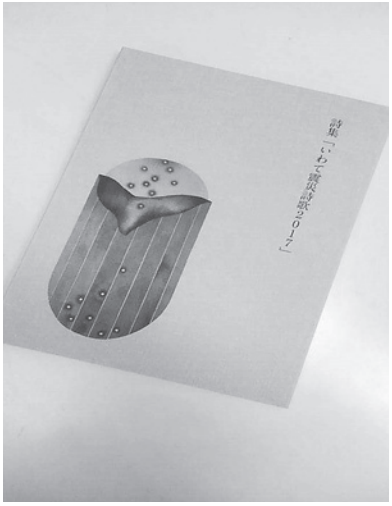
寄せられた詩歌原稿

今回の詩集「いわて震災詩歌 2017」には、県内から 44 編の作品の応募があった。直接の被災体験や親族が被災した体験を描く詩をはじめ、生き残った立場から書かれた詩が多い中、現場からは離れた地点で書かれ、あまり直接的な表現の書き方ではないものの表現の深みを感じさせる詩など、応募作品は、世代の感性の違いもあり様々な角度から書かれていて、それらが結実したものが今回の詩集となっている。



「いわて震災詩歌」応募作の選考会（2016年12月26日）

応募作品の選考に当たっては、選考委員の斎藤純氏の表現を借りるなら、「借り物の言葉」で常識的な表現となっていないものを評価することを選考委員一同の姿勢とし、できるだけその人独自の表現となっている作品を選んだつもりである。ただし、選考委員が一人でも異議を唱えた作品については選考から洩れることとなった。私の個人的な感想では、入選作としたい作品がいくつかあったものの、そのようなルールがあったので、選からもれた応募者にはご容赦願いたいと思う。



詩集「いわて震災詩歌2017」

今回の詩集での優秀作をいくつか紹介したい。中村祥子（さちこ）さん（大船渡市）の「まぶしい朝が来て」での緊迫した状況を活写する表現手法に注目し、私は高く評価したい作品であった。照井良平さん（花巻市）の「飛沫（しぶき）をあげて」では、被災した兄をなんとか支えようとする切ない心情が描かれ、照井知二さん（北上市）の「言はでの」は、東北の歴史を長大なスパンでとらえる視点が異彩を放っている。神久保敬里（じんくぼけいり）さん（久慈市）の「布告（ふこく）」は、被災者への不当な差別を跳ね返すしかないという強い怒りに満ち、松崎みき子さん（陸前高田市）の「野あざみの花が咲いていた」は、最近亡くなった母との思い出を通してソフトに震災を語り、中舘公一さん（住田町）の「K さんのこと」は、聴き語りの形式をとって、被災者が口に出せない思いをくみ取った作品となっている。入選作にも優れた作品も多く、その中では、本堂裕美子さん（宮古市）の「なにも失っていなくてごめんなさい」とする表現などが強く印象に残った。

以上のように、震災と向きあった優れた作品が今回の詩集に結実している。機会があれば、是非、この詩集を手にとって一読されることを強く進めたい。心の中で抱きしめることのできる一行の詩句、言葉と出会えるはずだと確信している。

２万人近くの人が犠牲になったのである。その人それぞれの２万ちかい人生ドラマがあり、その家族友人親戚を含めると数十万の未完のドラマが残されたのである。残された者への宿題として、亡くなった方々の人生を全うさせるようなドラマをまとめ、墓名碑に捧げることができたらと思うのである。

ドラマひとつひとつに言葉を添わせ、言葉が寄り添い、言葉でドラマを再現し、そして言葉によってドラマを完結させてそれが伝えられてゆくなら、現代に残る大長編小説なんか超越するものが残せるはずだという妄想さえ抱いてしまうのだ。詩の言葉もきっと役に立つであろう。今、その願いが強くなってきている。

復興が進む中、残された私たちの心の中には瓦礫の荒野がまだ拡がっている。その荒野を文学的営為で乗り越えて行かなければならない。原爆の後に優れた文学が生まれたように、幾多の震災・人災を乗り越えて言葉の表現者達による優れた震災文学が育つことを期待したい。

‘こども劇団みやこデイジー’の設立

宮古市民文化会館　大　原　　愛

①劇団の始動

前年度まで２年間行ってきた音楽劇の経験から、宮古地区の子どもたちの継続的な演劇活動をすべく、2016 年 12 月、宮古子ども劇団を発足させた。演劇文化の乏しい宮古地区において、参加者が集まるかどうか不安な公募期間を過ごしたが、学校・学年の枠を超えて小学１年生から６年生までの 13 人のメンバーが集まった。前年度までの音楽劇の参加者は１人。あとはみんな全くの初心者だ。「劇が好き」「ダンスが好き」「みんなで何かやることが好き」参加の理由は様々であった。

劇団の開講式（2016年12月3日）

劇団の名前も保護者の方々から募集し、「こども劇団みやこデイジー」となった。宮古市の市花であるハマギクの英名から名付けたものである。

②稽古の始まり

講師は、宮古市周辺にお住まいの方々に依頼をした。昨年に引き続き、岩泉町在住の畠山泉さんを演技指導にお招きし、メンバーの交流を深めるレクリエーションが始まった。

初めは同じ学年、同じ学校の子ども同士で集まっていることが多かったが、回を重ねるごとに高学年の子が主体となって稽古を進めたり、低学年の子からも、これをしたいといった希望が出てくるようになってきた。

2017 年１月の練習から、台本の読み合わせが始まり、少人数で一場面を作ることが増え、こども達は役としての動き方や与えられた役の感情の表現に真剣に取り組んだ。

講師の畠山泉さんによる指導

レッスンを重ねるごとに劇公演に向けて良い雰囲気が作られてきたように思ったが、ついに配役を決める時になった。台本が配布されてからというもの、「この役じゃなきゃいやだ」「この役はやりたくない」と子ども達から希望や不満が出ることはしばしばあった。

そういう声が上がるたびに、畠山さんから「やりたい役がすべてではない」と子どもたちに

何度も説いてきた。

演劇の稽古というと、演出家が「ここはこう動いて」「この役は今こういう感情だから」と指示することを想像していたのだが、畠山さんは、演じる役の台詞に込める感情や、他の役者との間の動き方を自分たちで考え演じるよう、「助言」をする指導だったことが印象的だった。

「この役の気持ちを考えてみて」

「台詞は驚いているけど、驚いた動きってどんな動きだろう」

次第に、子ども達も自分で考えて動きを加えたり、「こういう感じ？」と言った声が聞こえてきた。回数が少ないレッスンの中でだんだんと劇ができていることを子ども達も実感してきたのではないかと思う。

③成長の速さに驚くばかり

1月の末から演技の他、歌とダンスのレッスンが始まった。歌唱指導を市内在住の金野侑さん、ダンス指導を雫石町在住の久慈幸恵さんにお願いした。

劇中に歌う曲は劇のために作られたオリジナルの曲だ。聞きなじみのない曲のためか、なかなか覚えられない。しかし一週間後、同じ曲の練習に入ると、前よりも格段に声が出るようになった。ダンスにしても、慣れない動きに戸惑うメンバーが多くいたが、2回目のレッスンでは、ほぼ完璧に踊ってみせてくれた。これには、私も、指導に当たっている先生方も一様に驚いた。レッスンを重ねるごとに「楽しい」や「うまくなりたい」思いだけで、急激に上達する子ども達のパワーに毎回圧倒された。

歌とダンスのレッスン

④沿岸地区で演劇を行う上での課題

沿岸地区は震災以後、人口の減少が著しく、子どもたちの数も減少している。今後活動していく上で重要なのが、演劇に関われる人たちをどう増やしていくかだ。特に、沿岸地区で演劇を行うことにおける大きな壁は、指導者不足だ。

音楽が盛んな宮古市では合唱やピアノ等の指導に当たる方が多くいるが、演劇指導はもちろん、ダンスの指導ができる方も極端に少ない。また団員や指導者をどう増やしていくかに限らず、大道具や衣装といった製作部門に関わる人たちをどう巻き込んでいくかにおいても、今後のためにも早急に考えていかなければならない。経験ある人を探すのではなく、興味がある人をどんどん増やしていくことが重要だと感じているが、どのように探していくかが大きな課題だ。

また、申込みで窓口に来て頂いた保護者の一人から思いがけない話を伺った。「山田や釜石でこども劇をやっているのを聞いたが、そこまでは通えない。宮古市には機会がなかったからこういう活動があるのを待っていた」という。

これまで宮古市では演劇をする機会がなかったことに気づかされた。毎月１度、劇団メンバーの保護者会を開いているが、その中でも、たびたび山田･釜石地区の子どもたちを対象とした演劇活動のことをよく聞き、昨年までの宮古での音楽劇の活動を知っている方は多くはなかった。これまでの２年間の活動があまり知られていないとすれば、もっと地道に劇団活動を広めていかなければならないと感じた。

⑤今後の思い

「こども劇団みやこデイジー」の活動に携わる中で、メンバーの子どもたちには、地域を好きになってほしいという思いが強くなった。今回指導をお願した方々の大半は宮古市内や近郊に在住の方々だ。自分たちの町にはこんなに素敵な人たちがいる、というのを知ってほしいと思う。地域の人たちに囲まれて育った環境の中で、地元に縁のあるアーティストたちが育てば、より沿岸地域の芸術活動が盛んになるだろう。そのためにも、様々なアーティストとの出会いや、より良い舞台の環境を作れるよう、劇団を包括的にサポートしていきたい。

Ｖ ま　と　め

まとめ
「新たな文化復興への提言」～語り紡ぐ力を～

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター　理事長　坂　田　裕　一

はじめに

震災から６年。

昨年度は、生活基盤の復興整備が進む中、文化芸術における役割として『心の復興』を目指すために「伝える」「学ぶ」「交流する」「出かける」「新たに興す」の５項目について論述させていただいた。

今年度も、昨年度同様、当法人の実践活動の中から新たに気付いたことを中心に、今後の展望を模索してみたい。一年経てばニーズは変わる。ニーズに即応しながらも将来を見据えた活動を、本誌冒頭でも述べた通り「心のひだに強く張り付いた苦悩と失った命の叫びの向かう先を求めつつ、子どもたちが明日を信じて生きていくために、コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるために、心の内なる叫びを共有するため」の文化芸術の役割として、５つの項目をさらに深め「伝える」「学ぶ」「育む」「出かけ交わる」「興し参加する」の５項目で提言したい。

伝える活動

平成29年３月11日、もりおか町家物語館で開催された「いわて文化復興支援フォーラム」では、震災公募詩の朗読劇（詩劇）に続いて、「震災と詩歌」と題して、元朝日新聞編集局長であり、小説家の外岡秀俊さんと、盛岡出身の詩人・城戸朱里さんによるトークが行われた。

当法人では、平成27年度の活動で「あの日から」出版記念朗読劇を県内各地で行った。「あの日から」は高橋克彦氏ら岩手出身の12名の作家が、震災からの心の復興を命題にして短編小説を持ち寄り平成27年10月にアンソロジーとして出版したものだ。朗読劇の企画は、震災直後にやはり岩手の12名の作家たちが作品を持ちより出版した短編小説集「１２の贈物」に続くものだ。前回、ほとんどの公演は盛岡で行われた。「あの日から」の公演は沿岸被災地の４会場で３作品が上演され、その他は盛岡や二戸で行われた。上演後は作家や観客を交えたミニフォーラムやアフタートークを開いた。

被災地のトークでの共通の意見は、朗読劇の公演継続はもちろんだが、もっと内陸各地や全国でも公演して欲しいという声だった。そして、「私たちにも語りたいことがある」という声には衝撃を受けた。

報道によって、被災者の声は丹念に拾われ、多くの思いが全国の方々に届いているに違いないと思っていたことが、実は平面的であったことに気付かされた。

各地で風化されつつある震災の記憶を忘れて欲しくないという、被災地からの悲痛な叫びなのだ。震災で起きた心の傷や痛手、葛藤などをより深くかつ多面的に「記憶の深層」に刻み、それをやっと表層に現出させる時期が到来したのかもしれない。そして、その表現は、小説や詩

歌、エッセイ、映画・演劇など文化芸術の力によってこそ、効果を倍加させることができるのだろう。

本年度の震災詩歌の公募はそうしたところから生まれた。

フォーラムを取材した岩手日報は3月14日の紙上で、外岡氏と城戸氏のトークを次のように要約（一部）している

「互いへの質問で、犠牲者の霊の目撃譚（たん）が多く聞かれた東北と阪神の被災地の違いについて、外岡さんが『行方不明者が多く、いなくなったときそばに誰もいなかったことが特徴。東北は語りの中に歴史を伝える風土性がある』と説明。震災という大きな出来事を文学や作品として語りうるかという問いには城戸さんは『悲しみだけに支配される時間が過ぎなければ難しいが、時間の中で作品化する可能性が出て来る』とした。」

記事は、最後に、「言葉で語り得ることと語り得ないことの境界」についての客席の質問を受けた二人の言葉から、次のようなまとめを導く。

「語り得ないものに対して沈黙するのではなく、教訓や伝承を後世に引き継いでいく言葉の力の重要性を強調した」

このことが、文学や演劇などの表現の役割と信じたい。

平成29年度以降も、こうした声（記憶）を語り紡ぐ活動を続けたい。

学ぶ活動

この数年、指導者不足、後継者不足の深刻さを論述してきた。

状況に大きな変化がないと同時に、何かの文化芸術活動を起こす際の大きな障壁とすらなっている。

昨年度の提言の中でも次のように記述させていただいた。

「震災後のコミュニティ再生に大きく寄与し、被災者の心の拠り所にもなった祭りや民俗芸能も例外ではない。外部からの参加者や資金の支援がなければ、成立困難な祭りも少なくない。

被災地での高齢化と人口流失は、全国のどこより加速していると言ってよいだろう。華道・茶道・書道など暮らしに密着した生活文化から、美術・音楽・演劇といった芸術文化まで、人手不足は進行している。特にも個人レッスンを核とする表現においては、少子化と地域経済の脆弱性も相まって、指導者の生活基盤さえ弱体化させ、被災地において新たに指導者の道を歩むことを困難にしている。

指導者不足･後継者不足は「市場の力」「個人の力」では補いきれない段階に来ている。従来とは違う形での補強が必要だ」

この状況は、昨年度と少しも変っていない。むしろ悪化の一途をたどっている。「従来とは違う形での補強」はいよいよ必要度を増している。

私たちは、微力だがこのため平成28年度に、昨年度に引き続き、文化イベントの受付案内のノウハウを学ぶ「ホールレプショニスト」研修を久慈市と宮古市で行ったほか、舞台技術の市民向けワークショップを行い、併せて80名以上の参加者を得た。

ここで確認しなければならないのは、ホールは職員だけにノウハウを固めてはならないということだ。ホール＝文化会館は、特に地方になればなるほど唯一の文化集積機関＝文化の殿堂

としての役割が重くなる。ホールは閉じられたブラックホールであってはならない。そこに集う人々は暮らしの場に表現やノウハウを持ち帰り、地域に還元しなくてはならない。

また文化会館や公民館は発表の場であり学習の場であるが、ややもすると利用施設としての貸スペースの役割に重きを置く場合が少なくない。貸スペースの役割も住民の自主的な発表の場、学びの場を保障するために大切である。同時に、積極的に住民の潜在的な文化ニーズを掘り起こす「学び」の事業を展開させることも必要だ。

現在の状況を抜本的に解決するには、地域ごとの学びの場の整備と指導者招聘のシステムづくりが必要である。このための、当法人としてはそのシステムづくりへの提言を行うとともに、文化会館で行う「学びの場」の実践をすすめていきたい。

育む活動

次代を担う子どもたちの文化芸術体験は、持続可能な活動でなくてはならない。もちろん、一度だけのかけがえのない体験も子どもたちには大きな意味を持つが、ここでは子どもだけではなく、子どもを取り巻く大人たちや地域社会を含めて「育む」ことを考えてみたい。

平成27年度に、宮古でジュニアアンサンブルが、28年度に子ども劇団が発足した。釜石でも子ども劇団が発足した。

子どもたちを中心に据えて、それを支える大人たちの輪が出来、地域にとっても活動する子どもたちがかけがえのない存在となり、子どもたちの地域への愛着も生まれる。

盛岡の例だが、キャラホール少年少女合唱団の活動が好例である。子どもたちは団を卒業する年齢に達した後も、ＯＢＯＧとして、ことあるごとに後輩の活動を支援している。その保護者たちの活動も同様である。

子どもたちの文化芸術活動を支えるためには、表現のノウハウを学ぶばかりではなく、人間教育的な要素や、集団のきまりを学ぶことも大切になってくる。文化芸術の専門性ばかりではなく学校や地域との連携も不可欠だ。

また、多様な表現に子どもたちが触れ合える仕掛けも必要だ。学校教育の場だけではなく、文化会館や公民館での体験講座の強化なども提言したい。

さらに、表現力豊かで将来の可能性を感じる子どもが、地域社会の中で可能性を引き出せる機会に恵まれない場合も少なくない。沿岸や人口の少ない県北、山間部ではなおさらである。そこに必要とされる指導者を派遣することが望まれるとともに、子どもを機会のある場に派遣することも必要である。こうした支援はどう制度化できるか、平成２９年度には試験的な実施例を導きながら、検討したいものである。

出かけ交わる活動

出かけ交わる活動は一方通行であってはならない。これまでは、主に被災地域へのお出かけ、文化施設からのアウトリーチ、出前の活動が中心であった。

昨年度、私たちはこれに被災地からの発信の活動の必要性を訴えた。

平成28年度は、演劇公演「残花～1945年　さくら隊　園井恵子～」を企画製作し、東北と東京で公演した。原爆で命を失った岩手出身の女優･園井恵子の夢を、震災で失われた多くの人々

の命と夢を結び、岩手発の舞台とした。身の丈以上の冒険的な事業だったが、作・演出家が、この作品づくりで評価され。紀伊國屋演劇賞を受賞するという大きな成果をあげた。

「伝える活動」にも通じるが、震災からの記憶の発信は、外部の文学者や演劇人に委ねるだけではなく、住民自らが表現活動を外部に発信させることも必要である。震災直後は三陸沿岸に秘蔵されていた優れた民俗芸能が国内外に紹介され多くの人々に感銘を与えたが、今後は、いよいよ演劇や音楽、美術などの現代社会と人の心を写し取る表現の出番である。臆することなく外へ出かけたい。そのことが多くの支援を受けてきた被災地からの感謝のメッセージにもなり得るに違いない。

そして、それは「交わる＝交流する活動」にも通じる。交わる活動には、世代間の交流、地域間の交流、異ジャンルの交流がある。

平成28年度は実施できなかったが、平成27年8月に、演劇活動を行う宮古、二戸、岩泉の子どもたちが、一緒に2泊3日の合宿でワークショップを体験した。講師は東京から専門家を招いた。子どもたちにとって貴重な体験だった。「育む活動」でも述べたが、次代を担う子どもたちが交流する体験は、次の時代の地域交流の芽にもなりうるだろう。

過去の提言書でも述べているが、震災以前、内陸部と沿岸部の文化交流は薄かった。距離的難点が交流を疎遠にしていた。震災の支援活動によって交流は飛躍的に深まり。交通網の整備も進んでいる。しかし、支援活動が縮小しつつある中、交流自体も縮小する恐れがぬぐい切れない。

異ジャンルの交流も捨てがたい。三陸国際芸術祭はコンテンポラリーダンスと民俗芸能の交流から生まれた。次に記述される市民参加劇も異ジャンル交流がしやすい機会である。異ジャンルの交流からより広いコミュニティが生まれ、地域の発信力も高まる。

平成29年度、岩手芸術祭は盛岡一極集中から、相互交流にも力を入れる。表現者が相互交流する中で、互いに刺激を受け互いを磨く中で、大きな連帯の輪を築くことができるだろう。

出かけ交わる課題は時間的制約と経費の課題である。交通網の整備で距離的時間が短縮できても交通経費の削減はままならない。交流距離が長ければ長いほど経費はかさむ。次代を担う子どもたちの交流、表現者の相互交流にこそ時間と経費をかけたいところだが、そこに回す余力は県内には乏しい。

このための財源確保には、行政ばかりではなく、広く多くの国民、企業啓発理解の活動強化が必要である。

興し参加する活動

岩手県内で実施される市民参加劇は、42年の歴史を誇る老舗の「遠野物語ファンタジー」のほか、北は二戸の市民文士劇から南は一関まで18カ所（隔年開催を含む）で行われている。自治体や文化会館が主催するもの、実行委員会が主催するものなど形式が様々だが、地域づくりを目的に、多様な市民が参加できる舞台づくりが、その要件となっている。

県内の会館は、厳しい寒さの冬に、文化会館利用が極端に減少する。成人式後の1月から、お彼岸前の3月までは一般利用が数回程度という会館も珍しくない。この状況を打破しようと始まったのが、遠野市文化センターの「遠野物語ファンタジー」である。演劇、ダンス、吹奏楽の

演奏をミックスさせ、地域素材としては「遠野ブランド」の根源的な価値とでもいうべき「遠野物語」の譚を台本のベースに置く。大道具や衣装づくりも市民の手作りである。いやがうえにも地域を意識し、ひとつのものを一緒に作り上げるという中から、連帯感が生まれる。過去の提言でも述べてきているが、「釜石市民劇場」は、震災２年後に屋外のイベントテント施設で再開した。市民会館再建まで待っての再開を進言する声に「やれない辛さより、やるための苦しさの方がどんなに楽か」とのメッセージは心に響いた。そこには市民劇を通じたコミュニティがある。

多くの町の市民劇場に通底しているのは、演劇好きの市民の趣味の延長上にある「舞台に立ちたい」という思いにとどまらず、地域の中で暮らし、地域社会の中で、市民参加劇の役割をしっかりと担おうという思いである。

沿岸地域では、この市民参加劇が少ない。震災以前は、釜石以外では久慈市山形町の「おらほーる」の市民劇のみだった。宮古では、過去に一度だけ劇研麦の会が主導し、実施したことがあるがそれのみで終わっている。

参加する文化活動を継続させ、それをコミュニティの核とするために、祭り芸能が大きな役割を果たすことは、今度の震災後の祭り芸能への市民の共感で証明されている。しかし、仮設から災害公営住宅への移住、新たな造成地への住居新設によって、かつての地域コミュニティは離散し新たなコミュニティづくりが求められてきている。それには、地域に根ざしてきた祭り芸能以外にも気楽に参加でき協働してつくりあげる「もうひとつの祭り」を興すことが求められる。多くのジャンルが融合でき、いろいろな立場から参加が可能な市民参加劇は、「もうひとつの『文化』の祭り」でもある。

しかし、ひとくちで市民参加劇と言っても、それを興すためのノウハウが必要である。演劇の専門知識はもちろんだが、集団づくり、市民参加のシステムづくり、財源の獲得ノウハウも必要である。こうしたノウハウは実例から導かれるだろう。数地区の実例を調査し、共通すべき課題とその対処方法を調べることで、他地区への参考事例として供すべきノウハウを獲得する必要があるのではなかろうか。

宮古市民文化会館では平成 29 年度の事業として、初の市民参加劇を行う。

この事業の進捗から浮かびあがる課題と対策を調査研究し、他地域の参加劇との比較検討を行う中で、多くの市民劇に対応可能なノウハウ冊子としてまとめ頒布することが必要である。

おわりに

これまでの文化支援ネットワークの活動は、被災地の文化的ニーズを掘り起こし、刻々と変化するニーズに対応した支援を可能にしてきた。

今後は、さらにその活動を強化し、被災地自ら発信参加する文化事業をより強力にサポートするとともに、「コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるために、心の内なる叫びを共有するため」の文化芸術の役割として、「伝える」「学ぶ」「育む」「出かけ交わる」「興し参加する」の５項目の文化芸術活動の支援について、持続可能な形について「試行」「実施」と行政、企業、団体、市民への「提言」を続けていきたい。

この冊子は岩手県の「平成28年度NPO等による復興支援事業」の補助を受けた、
「いわて文化支援ネットワーク事業」で作成しました。

提言書　～いわて文化支援ネットワークの活動から～
『震災から6年　被災地の次世代文化を育む』
平成29年3月
発　行　特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
〒020-0874 盛岡市南大通1丁目15-7 南大通ビル3F
TEL 019-656-8145　FAX 019-656-8146
Eメール info@iwate-arts.jp
編　集　　株式会社reto
印　刷　　杜陵高速印刷株式会社

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター